

目次

はじめに……………IX

凡例……………XII

第一章 自己、欲望、無我

第1節 欲望と自己……………2

第2節 無我と無我説……………12

第3節 最初期經典の非我説……………20

第4節 五蘊ごうん非我説……………29

第5節 五蘊と無我説……………40

知識の頁

1-1 原始經典……………52

1-2 小部經典と最初期經典……………53

第二章 無常と無我

1-3	結集と部派分化……………	54
1-4	律藏……………	55
第1節	アートマンとブラフマン……………	58
第2節	無常……………	66
第3節	五蘊無常と無我説……………	75
知識の頁		
2-1	バラモン教……………	81
2-2	新興自由思想―六師外道とジャイナ教……………	82

第三章 縁起と覚り

第1節	縁起の理法……………	88
第2節	十二支縁起(説)……………	93
第3節	最初期経典と縁起説……………	100

第4節	アীগマ経典と十二支縁起説……………	108
第5節	覚りと縁起……………	113
第6節	名色の内実……………	119
第7節	名色と言語学……………	124

知識の頁		
3-1	六入(六処、六入処、六内処) 関連教説……………	136
3-2	三法印……………	137

第四章 縁起と空

第1節	相互依拠性と縁起……………	140
第2節	龍樹と『中論』偈……………	148
第3節	説一切有部と縁起(説)の変貌……………	154
第4節	龍樹と縁起……………	164
第5節	龍樹と空……………	174
第6節	縁起と縁起説……………	183

知識の頁	
4-1 大乘仏教と龍樹	193
4-2 説一切有部の五位七十五法	194

第五章 覚り、解脱、涅槃、止観

第1節 覚りの境地	196
第2節 釈迦の達成	202
第3節 二つの解脱	208
第4節 止観行(業)	220
第5節 涅槃への瞑想―観察(ヴィパッサナー)瞑想	229
第6節 二つの涅槃(ニルヴァーナ)	238

知識の頁

5-1 覚りを導く瞑想「四禪」	245
5-2 アーガマ經典の伝える成道(正覚)の型	247
5-3 アーガマ經典の伝える覚りの中身	248
5-4 覚りで修得されたとされる事項(縁起、四諦以外)	249

第六章 四諦(四つの真理)、無記、中道、慈悲

5-5 覚りの境地を表す言葉と四向四果説	250
5-6 四無色界定(四無色処定)と想受滅	251
5-7 三界九地説	253

第1節 縁起説と四諦説	256
第2節 相应部經典と四諦説	260
第3節 教説の場と四諦説	267
第4節 八正道	274
第5節 無記	286
第6節 無記という姿勢の所以	293
第7節 中道	302
第8節 慈悲	313

知識の頁

6-1 帰依の形式	326
6-2 過去仏伝承と燃燈(仏)授記	327

釈迦生涯の出来事

生涯Ⅰ 誕生から苦行訣別まで

- (1) 誕生伝承…330
- (2) 若年期の悩み…330
- (3) 四門出遊伝承…331
- (4) 結婚と子供…331
- (5) 出離、出家…332
- (6) チャンダとカンタカとの別れ…333
- (7) 求道…333
- (8) 苦行…334
- (9) スジャータの供養伝承…336

知識の頁

- I-1 釈迦の伝記書…337
- I-2 釈迦の生没年…338
- I-3 誕生日…340
- I-4 誕生の地…341
- I-5 釈迦の名前、呼称…343
- I-6 家系、出自…344

生涯Ⅱ 降魔成道からコーサラ国での布教まで

- (1) アーガマ經典の降魔伝承…345
- (2) 仏伝の降魔伝承…347
- (3) 仏伝の伝える覚り…348
- (4) 開教まで(梵天勸請)…349

(5) 初転法輪…351

(6) 初転法輪直後の経過と有力な援助者と弟子の帰依…352

- (1) ヤサとその親族の帰依…352
- (2) ウルヴェーラーでのカッサパ三兄弟の帰依…352
- (3) ビンビサーラー王の庇護…353
- (4) サンジャヤの弟子サーリプッタとモツガラーナの帰依…353
- (7) カピラヴァットウ帰郷諸伝から推察される史実…354

(8) 帰郷前後の出来事…356

- (1) 大カッサパの入信…356
- (2) 給孤独長者による祇園精舎の寄進…356

(9) コーサラ国での布教活動…356

- (1) パセーナデイ王の帰依…356
- (2) ヴィサーカ夫人(ミガーラの母)の寄進…357
- (3) 盗賊アングリマラーの出家入信…357

知識の頁

- II-1 釈迦関連シヤカ族系図…358
- II-2 マハーバジヤーパティー等シヤカ族女性の出家…359

生涯Ⅲ デーヴァダッタの離反から入滅まで

- (1) デーヴァダッタの離反…361
- (2) シヤカ族の滅亡…362

- (3) 最後の遊行 1 入滅の予告まで…364
 - (1) 「七不退法（衰退しないための法）」の教説…364
 - (2) サーリプッタとの法話…365
 - (3) 遊女アンパバーリーの帰依…366
 - (4) 雨安居時の大病とアーナンダへの教え…366
 - (5) 命を捨てる決意の表明とそのいきさつ…366
- (4) 最後の遊行 2 入滅まで…368
 - (1) 正説吟味についての四大教法…368
 - (2) 鍛冶工チュンダの饗応と死に至る病…368
 - (3) 入滅の床へ…368
 - (4) 死後への備えと最後の弟子スツバダの出家…369
 - (5) 臨終と最後の言葉…370

知識の頁

- Ⅲ-1 釈迦三十二相と剃髪…371
- Ⅲ-2 釈迦十大弟子…372
- Ⅲ-3 教化活動範囲…373

引用原典と参考文献…376

主要事項索引…L1

はじめに

本書は、仏教の深遠な思想を、誰でもわかりやすく理解していただけることを目的として書かれたものです。紀元前五世紀（または六世紀）に釈迦が開いた仏教の教えは、現代に至るまでに多くの変遷を経て膨大な教学的蓄積を残していますが、本書では、その始祖の教えがどんなものであったかを、とりわけ「自己」というものをどうとらえていたか、ということを中心に据えて論じています。

今日、釈迦の始原的な教えを伝えているのは『法華経』や『般若経』などの大乘経典ではなく、『阿含経典』などの、いわゆる原始仏典であるという見方は徐々に一般的になり始めました。そして、そうした原始仏典による釈迦の思想の解明を謳っている本は少なからず世に出ています。一般者向けに書かれたものであっても、なじみの薄い漢訳経典由来の仏教用語を当たり前のよう駆使していたりするために、容易に理解できないものとなっている場合が決して少なくないようです。また、平易な表現を心がけ、文章の表面的な意味は十分理解できるものではあっても、思想面での読者の咀嚼への配慮が不足しているためか、「腑に落ちる」というような思いを味あわせてくれる段階にあるものは多くはないようです。

そこにわたしのような門外漢が入り込む隙があるわけですが、本書の執筆の目的は、まず釈迦の思想についての読者の理解を、単なる知識の習得ではなく、その「腑に落ちる」段階にまで導こうということにあります。そしてもう一つの目的は、それを達成するための手段に関わることですが、従来の書ではあまり配慮されているとは思えない、釈迦の基本的認識と「覚り」と、それにもとづいてあみだされているはずの修習法の統合的把握、つまり、釈迦がど

う世界を認識し、あるいはどう認識すべきだとみなしていたかということ、また何を覚ったのかということ、弟子達の覚りを導くために何を説いたかということ。さらにその達成のためにどんな修行を必要とし、それをどんな修行法として具体化したかということ等々、それらについて、それぞれを個別の説明で自足的に済ませるのではなく、それらの有機的な関連性を明らかにし、その必然と必要を理解できるようにする、というのがそのもう一つの目的です。

そうしたことを容易にするために、わたしは次のような工夫をしてみました。まず極力原典を引用して思惟の根拠を明らかにすること。仏教専門用語は必ず現代語に直すか解説を伴って使用すること。経文などの仏典は原則として現代語で紹介すること。注釈的なものを別に設けずに本文の中にそうした要素をおこみ、かつ読みやすい文章になるよう努めること。そして、思想的な把握が知識的なものの理解の手に妨げられることがないように、知識的なものは頁を改めてまとめて論じること。さらに釈迦の生涯を別立ての形で手短かに紹介し、その人となりの理解に供することなどです。思想や哲学といわれてもピンとこない方は「生涯の出来事」をまず読んで外堀を埋めてから本丸に取りかかることをお勧めします。

釈迦の思惟の出発点とは、「人にとって生きるということが苦しみとなってしまうのは、永遠不滅ではありえないはずの、自分ととそれを取り巻く世界を、いつまでも常に変わらずにあり続けていると錯覚してしまい、それに執着するためだ」ということであり、その教えの核心とは「執着からの解放を目指して、その錯覚発生の仕組みを認知し、それを機能しないようにさせることが急務だ」ということであると私はとらえました。そして「覚りを開く」とはその錯覚を生みだす仕組みの理解と、それを持続的に機能不全に至らしめる手段と、それによって得られる、いわば透明な心的境地を包括的かつ同時に体得することなのだと思います。簡単にいえば欲望から完全に解放された境地とそれに至る方法を同時に体得するということになると思いますが、欲望が苦しみを生むという、人生を自覚的に味わう

ことを始めたなら誰でもすぐ気づくその因果関係から無縁になることは、その理解の容易さとは裏腹に簡単ではないことは、これもまた人生に自覚的であればたちどころに気づかされることでしょう。釈迦の教えとは、そうしたままならない状況からいかに脱出するか、また自分で脱出できない人をどう救い出すかということについての比類ない処方箋といえるでしょう。そこには求道の初心者から、熟練者までへの配慮があり、それぞれに合わせた教説が用意されていますが、ブツダの教えをひょうぼう標榜して残された経典が、原始仏典だけでも膨大だということは、またその理解のみに留まらない体得ということが、当然ながら容易ではないということの証といえるでしょう。

仏教を含めた東洋思想が、近代合理主義のもたらした閉塞へいそく状況を打開する鍵を握るものとして、脚光を浴びてすでに久しいですが、とりわけ仏教は、その当初から人間中心的な立場を捨て去っている点、人間中心主義をかかげて展開した近代文明が生み出した様々な弊害を乗り越える思惟を内包するものとして、その価値が改めて見直されていますし、その相対的価値観は、現代思想にも通底する問題意識を喚起してくれる点、刺激的のみならず、今日世界を揺るがす宗教や民族に由来する紛争を解決に導く有効な思惟を導くものともいえます。また釈迦がみだした独自の瞑想法は、近年ようやく我が国にも浸透し、現代人の不安を解消する有効な手立てとして活用されつつあります。本書を通じて、そうした教えの根源を提示した釈迦の思想と當為を知ることによって、人間というものを考えるための、また生きてゆくための心の糧を得ただければ幸いです。

二〇一七年三月

著者識

凡例

一、人名、地名は、「ニルヴァーマ」などサンスクリット語由来の語句がすでに一般的であるものを除いて原則的にパーリ語表記にもとづき、それに近い日本語の発音をカタカナで表記した。ただしサンスクリット語で表記された原文を引用した部分については、それをパーリ語表記に改めず、サンスクリット語の発音に近い日本語の発音を表記した。

一、パーリ語経典の翻訳文などの引用に際しては、補足する語句は「 」で囲む形で表記するのが通例になっており、本書もそれに従った。また、説明的な補足は（ ）で囲む形で表記した。『サンユッタニカーヤ』等の引用に際しては「通し番号」なるものを付したが、それは訳書の底本にもなっている、イギリスのパーリ文献協会（PTS）版に付されたものである。

一、難読漢訳経典用語の読みに関しては、日本で慣例になっている読みをルビで付した。不明なものに関しては仏教用語の読み方についての原則的な通例に従い、主にその呉音をルビで付したがあえて付さなかったものもある。

一、漢訳経典の引用に際しては、原則として旧漢字は新漢字に改めた。